

多摩永山中学校だより

編集・発行 校長 佐藤 信雄

<http://schit.net/tama/ihtamanagavama/>

私は本をあげただけ。ページを開いたのは、あなた。

校長 佐藤 信雄

世界初の人工衛星は、今から67年前の1957年（昭和32年）10月4日に打ち上げられました。ソビエト連邦（略称 ソ連 ほぼ今のロシアにあたる）が打ち上げたスプートニク1号です。当時、ソ連とアメリカは熾烈な宇宙開発競争を始めており、どちらが世界初の人工衛星を打ち上げられるか競っていました。ロケットの打ち上げで失敗を繰り返して先を越されたアメリカは、激しいショックと焦りを感じました。そしてこのことがきっかけとなり、アメリカの学校では数学や理科の授業内容を高度にして、すぐれた技術者を養成しようとなりました。生徒の立場になって言えば、数学と理科が一気に難しくなったわけです。ソ連のスプートニク1号の成功によってもたらされたアメリカの衝撃と危機意識や対応をまとめて、「スプートニクショック」と呼びます。アメリカ政府の要職にある人たちだけでなく、一般の国民たちも、アメリカが宇宙開発に遅れたことに驚きと不安を抱いていました。そんな秋のある夜から、物語は始まります。

10月のある夜、ウェストヴァージニア州の炭鉱町コールウッドの人々は、みんなで夜空を眺めていました。スプートニク1号を眺めるためです。やがて銀色に輝く星が、ゆっくりと秋の夜空を横切っていきました。「爆弾でも落とすんじゃないか？」と町の人々は不安を口にしていましたが、高校生のホームー・ヒッカム・ジュニアは瞳を輝かせ人工衛星を目で追っていました。そして決意します。「僕もロケットを作ろう。あの空に飛ばそう。」と。

それからホームーは、何回かの失敗をした後、学校一の秀才だが変わり者のクエンティンを仲間に引き入れ、友人たちとロケットの製作に没頭します。勉強が苦手なホームーたちでしたが、火薬や金属の知識を少しずつ身につけていきます。また炭鉱監督の父親や工場の人たちなどにも支えられ、ホームーたちのロケットは高度100m、200mまで飛ぶように進歩していきます。理科の先生であるミス・ライリー先生もホームーに「ロケット工学の基礎」という分厚い書籍をプレゼントしてくれました。ホームーたちはからかいと尊敬の混じった形で、回りからロケットボーイズと呼ばれるようになります。

ところがある日、ホームーたちは高校に来た警官に警察署へと連行されてしまいます。ホームーたちのロケットが原因で山火事が発生したという容疑をかけられてしまったのです。確かにホームーたちが一番最近打ち上げたロケットはどこに落下したのか分かっていなかったのです。この件以来、親たちはロケットづくりを禁止しました。周りの目もからかい交じりの温かなものから、冷たくさげすんだものになってしまいました。ロケットボーイズは、失意の時を過ごすこととなります。

しばらく父親の炭鉱の仕事を手伝っていたホームーは、ライリー先生から送られたロケット工学の本のことを思い出します。プレゼントされたものの、難しい専門書であったためろくに読んでいなかったのです。ロケットづくりを止め、炭鉱の仕事を手伝い始めた彼を父親は後継ぎができたとして喜びます。ホームーも、高校卒業後はこの町にとどまって一生炭鉱の仕事をするしかないと思い始めていました。あきらめきっていたと言ってもいいかもしれません。そんなホームーでしたが、やはりロケットをあきらめられなかったのでしょう、パラパラとページをめくっていきました。そしてその中に、ロケットの飛行経路や軌道を計算する方法が書かれていることに気がつきます。難しい数式が並んでおり、勉強の苦手だったホームーは一度は本を閉じようと思いますが、ノートを開いて勉強を始めます。この計算ができれば、落下して行方不明になったロケットを探し出して、山火事の原因はロケットではないことがわかるかもしれない、と思って。何日もかけてやっと数式を解き、ロケットの飛んだ方角と距離を計算したホームーは、クエンティンと山に出かけ、見事に行方不明だったロケットを見つけます。そこは山火事の起きた地域とは全く異なる場所でした。彼らの無実が証明され、再びロケット製作が始まります。

ホームーはライリー先生にお礼を言おうとしましたが、先生は学校にはいませんでした。悪性腫瘍のため、入院していたのです。お見舞いに行ったホームーは言います。「先生のくれた本のおかげで、僕たちはまたロケットを作れるようになりました。先生のおかげです。」と。ベッドに横たわっていたライリー先生は、微笑みながら言います。「私は本をあげただけ。ページを開いたのは、あなた。」と。

高校卒業が近づいたころ、ホームーたちは最後のロケットの打ち上げを予定します。応援してくれた町の人々にも声をかけて。そして父親が発射ボタンを押した直後、最後のロケットは薄く煙を吹きながらぐんぐんと空に上っていきました。そのロケットが青空に吸い込まれていく様子を、ライリー先生もベッドに横たわったまま、病室の窓から見ていました。涙ぐみながら。その後まもなく、ライリー先生は若くして亡くなりました。

これはアメリカでの本当のお話です。（「ロケットボーイズ」 ホームー・ヒッカム・ジュニア 草思社 1999年 より）

3年生、西へ ～修学旅行、楽しく終わる～

9月4日(水)～6日(金)、3年生は京都・奈良へ修学旅行に出かけました。何しろ暑かった夏の陽気はそのまま、始業式から2日後にはもう出発という、例年にない修学旅行になります。それでも先生方の奮闘と、実行委員をはじめとする生徒の皆さんの充実した取り組みで、無事に2泊3日を終えることができました。保護者の皆様も、ご準備などご支援をいただき、本当にありがとうございました。

生徒の皆さん、またいつか、奈良や京都を訪れて、今回の思い出を辿ってみてください。成長したいつの日か。



1人、1人と集まってきます



専用列車に乗り込みます



車内はトランプ大会!



薬師寺に到着 暑い!



薬師寺のお坊様のユーモアのある法話



神様のつかい、鹿さんと戯れます



勇壮な大仏殿を背景に1枚パチリ



ホテルの心遣いが嬉しい



夕食は部屋食です 豪華!



真剣な様子の班長会議



全員でいただく朝食も楽しい



靈験あらたかな八坂神社にて会えました



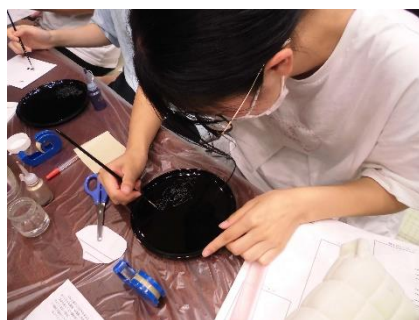
生徒の皆さんも入ったお蕎麦「やく羅」



みんなで輪になって人狼ゲーム!



2日目の夕食は楽しみにしていたすき焼



すき焼きの後は、蒔絵体験 みやびです



ありがとう、そしてさようなら、京都!

躍進する、たまながの生徒の皆さん

敬称略



○ソフトテニス部

◆第7ブロック日南地区新人大会 9月7日
女子個人の部 第1位 中野 礼菜(1年)・石垣 美空(1年) ペア
第2位 前川 美琴(1年)・川崎 実和(1年) ペア

◆第7ブロック日南支部ソフトテニス新人大会 9月14日
女子団体の部 優勝
男子団体の部 第3位

○美術部

◆あいち造型デザイン専門学校AZD中学生デザイン・絵画コンテスト2024 9月2日
入選 市成 千春(3年生)

○剣道部

◆令和6年度宏・多摩市・稲城市剣道大会 7月27日
男子個人戦 優勝 明田 悠弥(3年)
第3位 鈴木 和生(3年)
男子団体戦 準優勝

◆第50回多摩市民体育大会秋季剣道大会 9月15日
中学生女子の部 優勝 二階堂 花玲(1年)
第2位 遠藤 陽(2年)
中学生男子1・2年の部 第3位 梶田 桔平(1年) 崔 泰俊(1年)
中学生男子3年の部 優勝 鈴木 和生(3年)
第2位 明田 悠弥(3年)



○令和6年度薬物乱用防止ポスター・標語コンクール

入選作品は令和6年11月26日(火)から12月3日(火)までの期間、京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター7階連絡ブリッジに展示が予定されています。

◆ポスター部門

佳作 木内 茉里香(2年生)
特別賞 後明 色葉 齊藤 蒼斗 高橋 蒼空
辰巳 明日花 平山 大幹 古田 柚羽
和田 史亜 (五十音順 すべて2年生)

◆標語部門

佳作 早津 結月(2年) 「一度なら 心のゆらぎ 命取り 未来の自分を 考えよう」
特別賞 浦邊 律(2年) 「その薬 あなたの未来と引き替えに 大切なもの すべてを奪う」
大日方 陽(2年) 「薬物は、人の心に乗っ取るぞ 一回やったら やめられない！」



○歯・口の健康に関する図画ポスターコンクール歯・口の健康啓発標語コンクール

受賞作品は、令和6年9月28日(土)10:00から10月6日(日)16:00の期間、関戸公民館ギャラリーにて展示が予定されています。

◆ポスター 中学生の部

優秀賞 遠藤 陽(2年)
優秀賞 林 咲希(2年)

◆健康啓発標語 中学生の部

最優秀賞 佐々木 陸雲(2年)



新生会役員決定 新たなスタート！

9月11日（水）の午後、生徒会役員選挙が行われ、立会演説会と投票の結果、立候補した生徒全員が信任されました。新生会役員の発足です。新役員の皆さんはそれぞれ、「体育館の開放の継続」「他学年との交流」「過ごしやすいきれいな学校にするための掃除の推進」「この学校でよかったと思ってもらえる学校づくり」など、しっかりした公約を掲げました。この新役員だけでなく、全ての生徒で協力して、よりよい多摩永山中学校を作り上げていきましょう！先生方も応援します！暑さの中、急遽リモートでの演説となりましたが、選挙管理委員も候補者も応援演説者も、そして教室でじっくりと耳を傾ける皆さんも、全員が立派でした。ありがとうございます！

◆令和6年度生徒会役員 どうぞよろしくお祈りします◆

会長 日高 彩美（2年）
副会長 張 彦儒（2年） 菊池 風寧（1年）
役員 関野 七奈子（2年） 後明 色葉（2年） 竹田 春望水（1年） 前川 美琴（1年）



リモートの演説会を進めます



みんな真剣に聞き入っています



落ち着いて集計作業を進めます



当選の花が咲き誇りました

そうだ、図書館へ行こう！

今月ご紹介するのは、『がらくた屋と月の夜話』（作 谷 瑞恵 幻冬舎 2015年 図書番号 913夕）です。学校図書館司書の宮居先生がおつくりになった、9月のおすすめ本と中秋の名月の展示にもレイアウトされていた小説です。

さて、中学生の皆さんはご存じではないと思いますが、演劇が行われるのは劇場という立派な建物の中だけではありません。今でも東京のどこかで開かれています、大きなテント（学校の教室2つ分くらい大きな）をはってその中に舞台を作り、劇を見せてくれる劇団があります。テントなので広めの空き地があればどこでも演劇ができる。これはよく考えるとすごいことなのです。劇場という建物が無くても、演じる役者と見つめる観客がいた時、そこは劇場になる、ということなのです。テント芝居の劇団は、何の変哲もない空き地や神社の境内を、ロマンとリリシズムにあふれる感動の場である、「劇場」にしてしまうのです。

こうした劇団は大道具や小道具として、廃材や古道具、ガラクタを使います。例えば舞台をしつらえるにも、ホームセンターから新しい木材を買ってくるのではなく、昔どこかの家の柱だったような木や、古い扉の戸などを使います。「なぜそうした古いもの、捨てられたものを使うのですか？」と尋ねたところ、劇団の方は真面目な顔で答えてくれました。「古いものには、記憶が宿っている。昔の、人の思いが。そこが芝居にも影響するんだ。」と。

意外に思いましたが、言われてみると、そのテント芝居の劇団の芝居は、名もない人々のたくさんの思いが、ぼんやりと芝居の雰囲気深みに与えているように見えました。

こんな、若いころの体験を思い出したのは、この本を読んだからです。ガラクタにしか見えないモノ、壊れたモノたちをトランクに入れて月の夜の公園で客を待つ老人。「私はモノを売っているのではありません、モノが宿した物語を売っているのです。」と老人は言います。そんな老人と出会ってから、主人公のつき子の毎日が少しずつ、変わっていきます。予想していなかった世界との、知らなかった人との出会いが始まります…。

生徒の皆さんがつき子くらいの年齢になる前の今、読んでいただきたい作品です。美しい物語ですが、古いモノ



九月のおすすめ図書の展示 きれいです



『がらくた屋と月の夜話』とお薦めPOP

のように、どこかぬくもりと深みを感じさせてくれる作品です。テレビドラマにしたら楽しいものになるでしょう。つき子は誰が演じるといいかな？ 老人は誰が演じたら？ そう考えながら読み進めるのも、また楽しいですよ。ぜひ秋の夜長に、お手に取ってみてください。きっと、素敵な時間を過ごせると思います。